

# ふくりゅう

発行所 日本下水文化研究会運営委員会  
 発行責任者 谷口尚弘 (運営委員会副代表)  
 発行年月日 平成8年1月1日  
 印刷所 (株)愛甲社  
 編集 小松建司 新澤紀明  
 第3号 (通巻3号)

## 新年のご挨拶

### 会員の皆様に

運営委員代表 稲場紀久雄

新しい年が明けました。多くの問題を抱えたままではありますが、今年は子年、十二支のサイクルが更新した清新な年です。この新しい年を希望への回帰の年としたいものです。

今年は、私たちの研究会にとっても節目の年です。下水文化研究会の創設からちょうど十年、改組してから五年目に当たります。この十年の歩みを思うにつけ、私は会員の皆様に心からなる感謝を申し上げずにはおられません。

下水文化の成熟を図るとともに、広く深く啓発活動を行うことは、ますます重要になって来ました。昨年の阪神淡路大震災の経験に照らして、そのことは揺るがぬ事実となりました。それだけ研究会の使命も大きくなってきています。今年も会員の皆様と手を取り合って、夢のある実り多い活動を繰り広げて行きたいと思えます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

一九九六年 元旦



## 第三回下水文化研究発表会 無事終了!

平成7年10月5日”ルネこだいら”において行われた第三回下水文化研究発表会は約140名の参加者があり、基調講演(間片博之氏)、記念講演(松田旭正氏)に引き続き、各部門(特別「震災と下水道」、下水文化史、下水文化活動、下水文化研究)の発表が行われ、各部門の優秀論文に賞が授与された。その後、施設見学で、小平市下水道記念館「ふれあい下水道館」に行き、新たな感動を呼んでいた(別掲載参照)。最後に、親睦会が行われて、散会した。

開催日当日は、朝から、どんよりして天候であったが、何とか雨に降られないで済んだ。会館が、9時にオープンであったため、それからの会場設定で、9時30分の受付開始までは、目の回る忙しさだった。又、各部門の発表会場が離れており、特に、下水文化史は、迷路のような場所であったため、来場の方々には大変迷惑をかけたと思えます。

食事をするところも少なく、不満が多かったことと思えますが、皆さんが協力的であったので、

さほどの支障もなく無事終えることが出来ましたことを感謝いたします。

優秀論文に選ばれた方は、

- ◎ 特別部門 「震災と下水道」  
「神戸市への下水道復旧支援」  
植松 重男 氏
- ◎ 下水文化史部門  
「秋田城跡トイレ遺構の一報告」  
碓 信太郎 氏
- ◎ 下水文化活動部門  
「野川の水質調査」  
上原 公子 氏
- ◎ 下水文化研究部門  
「生態毒性からみた界面活性剤の環境  
影響評価」  
守田 康彦 氏

の方々でした。

レポート 小松

### 第3回下水文化研究発表会に参加して

(財)東京都新都市建設公社 植松重男

現在の職場に異動して間もないころ、栗田さんから、秋口ごろに日本下水道文化研究発表会が開催されるので「神戸市での下水道支援活動について」原稿を書いてくださいとの話がありました。

その時、私は「文化ってなんだろう」、「支援活動と文化とどのような関わりがあるのだろうか」と悩み、栗田さんに「文化ってなに？」と伺ったところ、「一言でいえば人と物事との係わりだ」と教えて戴き、そこで、そのような事であるならば、少しは書けるかなと、納得し取り組んだ次第でございます。

発表会では、「震災と下水道」の特別部門を設け、発表する機会を与えて戴きありがとうございました。そのうえ、最優秀賞を戴き身にあまる思いで、心から感謝申し上げます。この賞は、私一人だけでなく、今回阪神・淡路大震災支援活動に携わった大勢の方々に授かったものと受けとめております。

今回の研究発表会に初めて参加して、「温故知新」という言葉を思い、下水文化の大切さを痛感しました。

発表会のなかで、とりわけ、間片先生の基調講演「時代を映す都市河川～東京区部の河川について」は、心に残るものばかりでございました。

特に、治水計画基準が、時々の社会背景を受けながら変遷してきた経過を知ることができたこと。更に、都市における下水の排水を考えたとき、これまで、河川・下水道と別々に取り組んできたきらいがありましたが、これからは、各分野にこだわることなく、総合的な治水対策が重要であることや自然環境を保全し、都市河川を育てて行くには市民や行政に携わる人々の「川を愛する心」が最も大切である、とのご意見を拝聴し感銘を受けました。このことは、今後の仕事の上で、大変有意義で役立つものでございます。

最後に、日本下水道文化研究会におかれましては、このような機会を、どしどし設けていただくと共に、日本下水道文化、はたまた世界下水道文化の発展・啓蒙に寄与されることをお祈り申し上げます。

## 小平市長から当会へ 「感謝状」

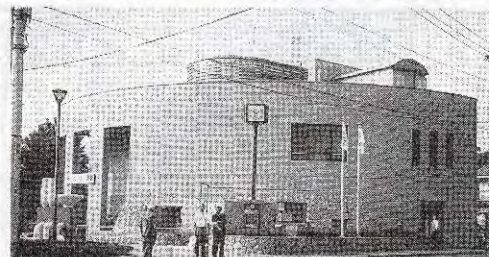
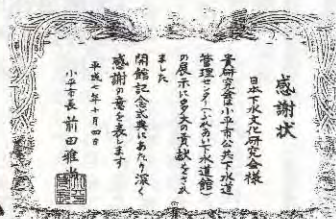
＝小平市「ふれあい下水道館」完成記念式典で＝

平成7年10月4日小平市民会館「ルネこだいら」において開催された小平市「ふれあい下水道館」完成記念式典で、小平市長から当会に対し「感謝状」が贈呈されました。

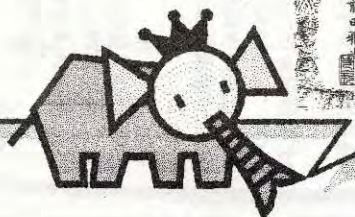
当会では「ふれあい下水道館」の計画当初から展示内容の相談や資料提供、原稿執筆などの面で、微力ながら協力させていただきました。

また、当館の特別展示室については「近代下水道の前史と夜明」のテーマで、当会の企画展示の場を提供していただいております。

感謝状 →



ふれあい下水道館全景

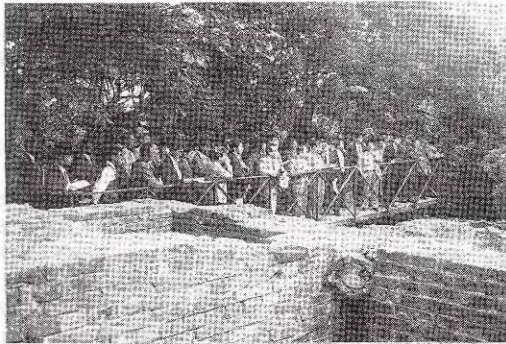


## 第三回下水文化を見る会 、前日の下水文化研究発表会に引き続き開催される。

当日は、快晴であり、集合場所の横浜駅に、三々五々？参集した会員は、大型のトラックバスに乗り、横浜市中部下水処理場を目指した。ししながら、参加者らも乗せるには、トラックバス（40名用）では無理があり、時間まで、こられなかった会員、及び、運営委員の一部は、別車で、処理場まで来ていただいた。そこでらも名用のバスに乗り換えての見学を行う始末であった。尚、見学希望も出しながら、参加者が一杯で、参加できませぬでした10名ほどの皆様には、大変申し訳ございませんでした。

横浜開港資料館の堀秀良さんに見学の説明もいただき見学の一日が始まりました。

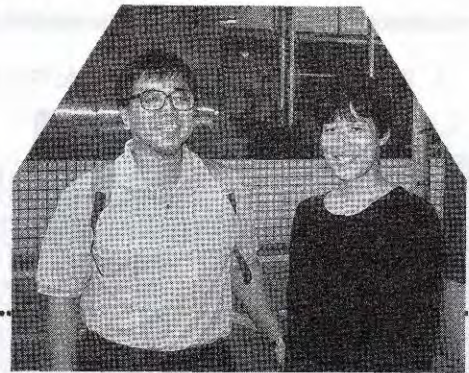
横浜在住の方がこんなところは知らなかったというほどに驚異みられないところも歩き、堪能できたと思えます。



お昼には、横浜名物のシューマイ弁当！のはおでしたが、手違いで、焼きめし弁当に化けていましたが、これが意外に好評でした。次日も開催してほしい弁当に？  
レポート 小松

### 見学コース

- ◎ 横浜市中部下水処理場  
石造り管きよ遺構、レンガ造り管きよ遺構、他
- ◎ 山手元町公園付近  
プラフ（石造り側溝）、記念碑
- ◎ 横浜開港資料館  
石造り管きよ遺構、資料館見学
- ◎ 新港埠頭  
日本初の鉄筋コンクリート管港内下水道
- ◎ 横浜公園  
R・H・ブランドンの胸像
- ◎ 灯台寮跡地  
ブランドンの本拠地だった場所
- ◎ ランドマークタワー  
明治30年につくられた2号ドック跡



石井百合子

## 下水文化を見る会に参加して

十月のはじめ横浜の下水文化を見る会に参加し、充実した一日を過ごしてきた。

最近までインドネシア、ジャカルタに滞在していた私にとって三年振りの秋であり、あらためて日本の秋の美しさ、そして、横浜の町の計算された美しさを見、味わうことが出来た。

下水処理場では石造・煉瓦造管きよ遺構を見ることが出来た。山下町の元外人居留地に見られる側溝はとて心に残った。これは、横浜の下水道の歴史の始まりでもあり、開港二年後に道路整備と共に構築されたものであるとのこと。普段気にとめることなかった道路ぎわの側溝を見ていたり、ふと、ジャカルタの町を思い出した。今だに、下水が建設されておらず、雨が降ればゴミが浮かぶ川は増水し、ゴミの詰まった側溝にあふれ、住宅は浸水し、道は川と化す現状が心に浮かび、深刻な気持ちになる。はるか昔からの計画性のある町づくり、そして、側溝の構築……と、日本の著しい下水道技術と進歩に驚かされる。

インドネシアにも下水道が建設されていたら、どんなに衛生的で、又、一般庶民の生活もレベルアップしていたことか。現実には、地下水汚染もひどく、ジャカルタの我が家では、一日数回あびる浴室のシャワーの水が臭く、色つきであったことを思い出す。

当然の事ながら、白い洋服は数回洗濯していくうちに、黄色く変色した。快適で、安全な生活環境下に住む、日本人である私はあわせてあることを感ぜずにいられない。

見学会は、限られた時間、大変内容濃く、充実して過ごすことが出来た。又、横浜の町が清潔で魅力あるきれいな町であることをあらためて認識した。

普段なんのさなしに歩いている通り……意識して目線を下にむけてみるとなにか楽しい発見があるかもしれない。

# マスコミ情報

**パルトン先生の写真と出会った！** 関西支部便り  
 幕末・明治期古写真等資料展『忘れられた日本の風景・風俗』と題した写真展が11月6日～12日京都大学付属図書館で開かれ、W.K.パルトンの曾孫である鳥海幸子さんと一緒にに行ってきました。このコレクションは、長崎大学所蔵の写真の中から厳選した百枚ということ、1968～90年に英国の収集家から購入したという写真が多く含まれています。どの写真も貴重なものでしたが、阪神大震災の後という点もあって濃尾大地震（明治24年）の写真に入館者の目が集まっていました。

鳥海さんによりますとパルトンはこの地震のことをよく話していたそうで、ことに英国人技師が設計した橋がなぜ壊れたかということ調査していたらしいということです。これまでに知られている史実（J.ミルンとともに現地に入り調査及び撮影を行い、貴重な記録を残した）と重ね合わせると今回の写真もその迫力ある優れた構図からパルトンが撮影したものに間違いなしと思われまます。

また、今年のパルトン忌の「パルトンと京都」という話の中に出てきた（パルトンが宿泊していたことが当時の新聞によってわかっている）外国人のためのホテル「也阿弥（やあ

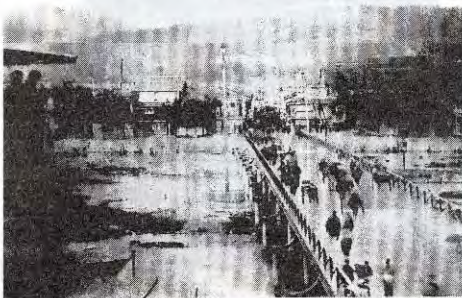
み）楼」のみごとな写真がありました。年代、季節、構図、技術などから見てパルトンが撮影して写真雑誌掲載のためイギリスへ送ったものである可能性が高いと思われます。このほかにも「琵琶湖疎水」など土木・衛生工学に関連したもので、しかも芸術性の高い写真が何枚もありました。このような写真について、我が研究会のみなさんはどのように思われるのでしょうか。きっとパルトン先生の視線を感じられるのではないでしょうか。

この写真展は、次のような日程で各地の大学で開催されます。ぜひパルトン先生や幕末・明治の日本に遭遇していただきたくお知らせいたします。

- 名古屋大学付属図書館 1995年11月27日（月）～12月4日（日）30日休館
  - 東北大学付属図書館 1995年12月11日（月）～12月17日（日）
  - 京大付属図書館 1996年1月23日（火）～2月12日（月）
- 関西支部 たでくら虫 b

追伸 百枚の写真すべてを収録した特製の解説書がいただけるのですが、京都の会場では部数が足りなくなってしまい、後半の入場者はコピーになりました。どうぞお早めに…

## ↓ 95. 11. 07 朝日新聞京都版の記事と配られた冊子の一部抜粋



### 京都の中心部や名所旧跡も

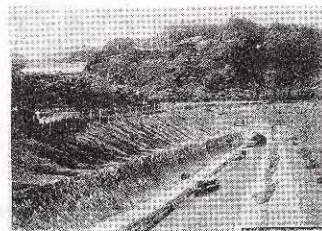
幕末から明治にかけて貴重な風景：100点  
 幕末から明治にかけての京都の中心部や名所旧跡も、この写真展で紹介されています。写真は、京都の中心部や名所旧跡を撮影したもので、幕末から明治にかけての貴重な風景を捉えています。この写真展は、幕末から明治にかけての京都の中心部や名所旧跡を撮影したもので、幕末から明治にかけての貴重な風景を捉えています。

### 第2章 第7節 名古屋城・濃尾地震・中

関ヶ原の戦いを征し、天下統一を果たした徳川氏、慶長8年（1603年）江戸幕府を開いた。家康は江戸を都として中央に位置し、東海道、中山道に通じるこの地に慶長15年（1610年）名古屋城を設け、彼の九男義直を配して西日本各地に対する要とした。ここに徳川御三家筆頭の尾張藩62万石が成立するのである。名古屋の城下町は当初から計画的に造られた。明治22年10月、名古屋に市制が施されたが、その頃の人口は157,000余人、旧尾張藩士が約5万人であり、町は武士たちの消費によって成り立っていたという。本コレクションには名古屋の町を題材にした写真が少ないので、名古屋城の他、中山道宿場と明治24年（1891年）10月28日にこの地域を襲った濃尾地震の被害状況の写真を示すことにする。

### 65 名古屋城 9.1×13.4 (48-92)

名古屋城天守閣は慶長17年（1612年）、本丸御殿は同19年に完成した。写真は天守閣と小天守閣を繋ぐ二の門廻りから撮影したものであるが、両天守閣の他、付属する建物が残っており、往時の城内の様子を伺い知ることが出来る。これらの建物は昭和20年（1945年）の戦災により焼失した。現在の天守閣は昭和34年（1959年）に再建されたものである。



(64 琵琶湖疎水)

### 濃尾大地震（根尾村水鳥谷の断層）

20.4×26.5 (39-18)

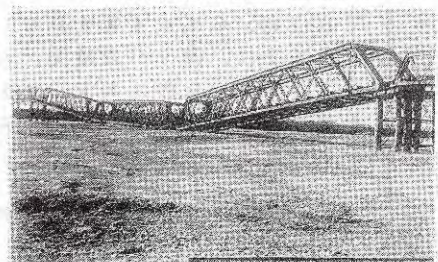
長崎大学附図書館所蔵古写真の中に、災害を撮影した写真が含まれている。この中に、濃尾地震の被害を撮影した一連の写真があり、日下部金兵衛のアルバムに収録されている。濃尾地震は、明治24年（1891年）10月28日6時37分に、岐阜県根尾村水鳥谷付近を震源に発生したマグニチュード8の巨大地震で、この際、根尾谷には高さ約3mの断層を生じ、約100kmの延長にわたって発生し、根尾谷断層を撮影したものである。



### 67 濃尾大地震（東海道本線長良川鉄橋）

20.4×26.5 (39-1)

写真は、濃尾地震により崩壊した長良川鉄橋である。長良川鉄橋は、当時のお雇い外国人であったイギリス人のC.A.W.ポナール（C.A.W.Pownall）により設計され、明治21年（1888年）1月に架設された。200フィート5連、100フィート2連の鍊鉄（れんてつ）製のダブルワーレントラスであり、当時のわが国が誇る最大級の鉄道橋であった。川の中央部分の鉄柱構造の橋脚が折損し、3連の橋梁が落橋した。これ以外にも、多くの鉄道被害が発生し、東海道線の全面復旧には約6か月を要した。



# マスコミ情報

大阪毎日 (夕) →  
95. 7. 20

↓信濃毎日 (日刊)  
95. 11. 9

下水道に詳しい大阪経済大学の稲場紀久雄先生から面白い本を送っていただいた。「川柳・江戸下水」(下水道文化叢書)。東京都職員の福田彰さんが江戸川柳の中から「下水」(当時、下水道と汚水の両方の意味で使われていた)を採った四百六十句を集めたものだ。中には艶っぽいものもあるが、排水、トイレなど都市の排せつ物を自然のサイクルの中で処理していた先人の知恵がうかがえ、興味深い。

△江戸では無用京都では指桶を出し、京都では仕立に桶を出し、たまたまと無茶が野菜と交換するシステム。江戸では小便用の張り紙だけ。

△下水も溜まれば白い水流れ、白い水は米のとぎ汁。「白水を流す」で金持ちの意気、汗水たらしで働けば、うらやまになる。

△へらがたがたまさか井戸で水を汲み、水道といっても多摩川の水。たまにはこんなこともあったのか。

当時、住居の間には下水は自分たちの手で処理するんだという「下水文化」があった。しかし、近代化の過程でこの文化は忘れ去られてしまった。端的な例が阪神大震災。トイレが使えず、皆あふたしてしまった——と稲場先生、関西の人々を心配する。(大)



下水文化

## 沈殿池 運河で代用

下水処理場の沈殿池が不足している。東京都水道局は、東京都下水道局の管内に、沈殿池の代用として、運河を利用する。東京都水道局は、東京都下水道局の管内に、沈殿池の代用として、運河を利用する。東京都水道局は、東京都下水道局の管内に、沈殿池の代用として、運河を利用する。

## 高層ビルに備えたい下水道

下水処理場の高層ビルに備えたい下水道。高層ビルに備えたい下水道。高層ビルに備えたい下水道。高層ビルに備えたい下水道。高層ビルに備えたい下水道。

## 内陸処分場なら 水源汚染の恐れ

内陸処分場なら水源汚染の恐れ。内陸処分場なら水源汚染の恐れ。内陸処分場なら水源汚染の恐れ。内陸処分場なら水源汚染の恐れ。

## 泳げる諏訪湖に 世界湖沼会議から

泳げる諏訪湖に世界湖沼会議から。泳げる諏訪湖に世界湖沼会議から。泳げる諏訪湖に世界湖沼会議から。

## 「環境教育」の実践を

### 「下水文化」の成熟に向け研究会



「下水文化」の成熟に向け研究会。下水文化の成熟に向け研究会。下水文化の成熟に向け研究会。

↑読売 95. 6. 6

下水をテーマに環境教育の教材 希望者に無料配布

人間と下水のかかわりを広い視野から見つめようと、学者や行政関係者らで組織する日本下水道文化研究会(代表||稲場紀久雄・大阪経済大教授)が、下水をテーマにした環境教育の教材「らしと水と下水道」(五十四頁)を作製した。二十三日から筑波大学などで開かれる第六回世界湖沼会議で報告する。

水の循環や下水道の歴史を解説。節水を勧めたり、下水処理場では処理できない有害・難分解性物質を流さない「理にかなった行動をとる習慣」を強調したりしている。希望者には無料で配布する。問い合わせは、東京都新宿区富久町6の8、日本上下水道設計技術本部、佐野広一さんへ。

↑朝日大阪版 95. 10. 22

第一回定例研究会実施される

今年初めての定例研究会が12月1日(金)にコンフォートにおいて開催された。

講師として、日本水道協会の斉藤博康氏お願しい、「英国上下水道の歴史」について、18時30分から20時まで講演が行われ、会場では氏が翻訳した、本「英国上下水道物語」(日本水道新聞社発行)を研究会が一部助成して販売した。

# アラカルト

## 新聞掲載欄から

1995年11月21日付「朝日新聞」東京版投書欄で、「下水文化」にも深く係わるような意見が載っていました

油污れは拭いた跡で台所のCMが最近よく流れています。ベタベタの油污れに泡のスポンジを直接つけて洗い流しているシーンをみるにつけて大変不快に思っています。油污れも紙などいふいて洗えば強力な洗剤など必要なく、私も生協から購入した米ぬかせっけんを水で薄めて使用していますが、少量でよく落ち、合成洗剤でできた「主婦湿しん」もなくなりました。ふき取って洗えば油が流し台に広がらず掃除も楽です。水の汚れが叫ばれて久しい今日も多量で強力な洗剤も「少量で強力な」洗剤を競うCMを見せてほしいと思います

武蔵野市主婦 Sさん

## 環境教育教材

### 「くらしと水と下水道」

が活用されています

『内容を拝見して、「淀川水系の取水と下水処理場」「秀吉の背割下水」など、大阪の地域につながる記事もあり参考にしてきたいと考えています。

社会科の教材研究や「地誌大阪」も担当していますので、教材のなかへ組み入れて活用させていただきます。』

東大阪市のY様から当研究会宛のお葉書の中から

## 「札幌」「横浜」にも下水道博物館が...

第4回下水道博物館情報交流会議 大阪市で開催

10月19・20日に札幌市・東京都・小平市・横浜市・名古屋市・滋賀県・大阪府・大阪市・神戸市の各都市及び日本下水道事業団の参加を得て、大阪市に於いて「第4回下水道博物館情報交流会議」が開催されました。

当会はアドバイサーとして参加をし、今年3月に作成した環境教材「くらしと水と下水道」の内容説明を行いました。

席上、神戸市からは「阪神大震災のため博物館建設構想は当分見込みもたたなくなつた」。札幌市は「平成9年度春に開館予定」。横浜市では「平成8年度に基本計画の予算要求をする」などの情報が寄せられました。

既に開館している名古屋市・滋賀県・大阪市・小平市からは、来館者が予想以上に多いとの報告がありました。

「阪神・淡路大震災に関する文献・資料」の収集を精力的に行い、去る10月20日から「神戸大学付属図書館『震災文庫』」が一般公開されることになったそうです。

今後も「震災文庫」のより層の充実・発展を目指し資料の収集に努める神戸大学付属図書館から、当会に「第3回下水文化研究発表会講演集」の寄贈の依頼がありました。

当会では「第3回下水文化研究発表会」で特別部門「震災と下水道」を設け、5編の有意義な発表を行ったところです。また、本年3月に開催しました「下水道をめぐる環境教育シンポジウム」において、稲場代表が「なぜ今、環境教育なのか～阪神大震災の教訓から」を講演されました。

そこで、当会として特別部門「震災と下水道」で発表された5編の論文を掲載した「第3回下水文化研究発表会講演集」と『なぜ今、環境教育なのか～阪神大震災の教訓から』を掲載した「下水文化研究」第7号を寄贈しました。

## 神戸大学付属図書館「震災文庫」へ

「第3回下水文化研究発表会講演集」と「下水文化研究」第7号を寄贈

### 「下水文化研究」第7号の記事訂正とお詫び

「運営委員会事務録」の記事中(二〇二ページ)下段七行目「斎藤博康氏翻訳による『英国上下水道通史』は水道産業新聞社から七月末までに出版されることと決定した」とありま

すのは、「斎藤博康氏翻訳による『英国上下水道通史』は日本水道新聞社から七月末までに出版されることが決定した。」と訂正させていただきます。この誤りについて関係各位には深くお詫び致します。

### 編集後記

やつと会報の名前が付くことになった。伏流(ふくりゅう)とは「地上の水流がある場所では地下を流れること」(日本語大事典より)とあり、私たちの会もある時は、表面に出、ある時は、静かに活動を続ける。そんな思いで命名しました。

今号は、盛りだくさんの記事があり、増ページとなりました。更に皆様からの投稿や情報をお寄せいただければ、(今年)の初夢でした。(建)

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひします。みなさまもお体にチュー意して一年間がんばりましょう。(茶坊主)